

梅花の歌 三十二首の一 并せて序より 大伴旅人

天平二年正月十三日に、師の老の宅に萃まりて、宴会を申く。

時に初春の令月にして、気淑く風和ぎ、

梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫らす。

わが園に 梅の花散る

ひさかたの 天より雪の流れ来るかも

わが園に 梅の花散る

ひさかたの 天より雪の流れ来るかも

【序意】 天平二年正月十三日に、大宰師の老の邸宅に集まって、宴会をひらく。折しも、初春の佳き月で、気は清く澄みわたり、風はやわらかにそよいでいる。梅は佳人の鏡前の白粉のように咲いているし、蘭は貴人の飾り袋の香のように匂っている。

【歌意】 この我らの園に梅の花がしきりに散る。遙かな天空から雪が流れて来るのであろうか、これは。【補記】 当時は小温暖期であったらしい。正月十三日、梅はかなり咲いていたとしても散るにはやや早い。一首は、あくまで\*前歌の「散りぬともよし」という仮定表現に食いつき、白雪の舞い落ちるのに紛うばかりに梅の花の散る世界を、言葉の上に造形してしまったところに価値がある。

(伊藤博「万葉集釋注三」集英社文庫)

\*前歌―「青柳 梅との花を 折りかざし 飲みての後は 散りぬともよし」巻第五―八二―笠沙弥。  
(歌意) 青柳に手折りかざして、相ともに飲んだその後なら、散ってしまったても構わない。

暮坂峠

若山牧水

乾きたる 落葉のなかに 栗の實を

濕りたる 朽葉がしたに 橡の實を

とりどりに 拾ふともなく 拾ひもちて

今日の山路を 越えて來ぬ

長かりし けふの山路 樂しかりし けふの山路

残りたる 紅葉は照りて 餌に餓うる 鷹もぞ啼きし

上野の草津の湯より 澤渡の湯に越ゆる路

名も寂し 暮坂峠